

# 大学博物館の糧と果実と——2022年度の會津八一記念博物館

肥 田 路 美

大学博物館の役割は、大学の教育・学術研究の歴史のなかで蓄積してきた資料を整理保管して未来に継承するとともに、それらの調査研究を進めて資料がもつ意味や価値に新たな光を当て、展示を通して学内外に公開すること、また、こうした活動を通して更に学術研究の可能性を拓けることにあります。2022年度の會津八一記念博物館を振り返る時、これらの責務に沿うべく地道な活動を進めて来られたことを、手前味噌ながら実感します。

まず、グランドギャラリーをメイン会場にした企画展示については、4月～5月に「お殿様と狩野派—秋田藩主佐竹氏と藩絵師狩野秀水家」、6月～7月に「早稲田建築—草創期の建築家展」、夏休み明けの9月からは「下総龍角寺」、そして12月～1月は「古代中国の神話と祥瑞—武氏祠画像石拓本」を開催し、また、近代美術展示室では春学期に「絵を見るまなざし—坂崎坦と坂崎乙郎のあつめた絵画を中心に」、秋学期は大社コレクション展、富岡コレクションについては「身近な動物たち」「みほとけの祈りとかたち」「達磨」「やきものに見る吉祥」と、今年も全体で十本を超える展覧会を実施しました。

このうち「お殿様と狩野派」は、狩野秀水家で代々伝えられてきた粉本資料六百点余について2018年から三年がかりの整理・調査研究の成果を発表した展覧会であり、近世近代美術担当の助手が三代にわたって進めてきたものです。また、「下総龍角寺」は、昭和初期から今日までに及ぶ早稲田大学考古学の調査研究の集大成であり、当館の収蔵資料に加えて多くの関係機関から幅広い関連資料を借用して構成した展示と展覧会図録や、10月に小野記念講堂で開催したシンポジウム「下総龍角寺再考—最新の発掘調査から—」では、主軸である考古学のもとで文献史学、建築史、美術史も参画した領域横断的な成果が盛られました。富岡コレクション展示室を第二会場として国の重要文化財である龍角寺本尊薬師如来像を公開し、当館における初の指定文化財の借用展示を実現できたことも特筆されます。さらに、宮島格三氏から受贈した質の高い資料のお披露目を兼ねた「武氏祠画像石拓本」は、會津八一蒐集拓本による2005年の同企画展を手掛けた館員が、これもまた学内外の様々な分野の研究者と進めてきた学際的研究の成果を発信するべく企画したものです。他大学の科研との共催という、より開かれた形で開催できたことは、当館の活動の新しい可能性を拓く試みともなりました。

いずれも長期にわたる調査研究を経て準備されたこれらの当館三部門の企画展は、大学博物館の真面目と言ってよいと思います。担当助手が二年という短い任期で次々交替していくのは、大学の組織ならではのようですが、そうした中でも学術的な調査研究が息長く継続されていくこともまた、大学だからこそでしょう。展覧会自体は「消えもの」ですが、幸いそれぞれの展覧会図録は高評を得てほぼ完売し、この先の更なる研究や

資料活用への礎になることと思います。

ところで、当館のアイコンにもなっている早稲田大学所蔵の美術作品を代表する一点に、前田青邨の《羅馬使節》があります。1929年に画家自身から寄贈された本作は、高さ3メートルもの大作のため収蔵庫での保管は不可能で、当館の開設当初からグランドギャラリー中央に設置された専用のケースに収蔵してほとんど門外不出の扱いとし、作品保護のために公開日程も厳しく制限してきました。けれども、昨秋、画家の生誕地である岐阜での大規模な回顧展に新たに発見された下絵とともに出展することになり、本作品に関する調査研究を一段と深めていただけたのは、作品の所蔵館としてたいへん嬉しい出来事でした。またその際に、十年ぶりにケースから外に出して専門家らによる詳細な点検を受けたことで、冒頭に述べた大学博物館のもう一つの責務である資料の保管と未来への継承について、問題意識を新たにする機会となりました。

所蔵資料は博物館の活動の源泉であり、それを糧として展示や研究という果実を实らせるべく館員一同いっそう精進するとともに、学内外の多くの方々のご支援に、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。